

1. 講師	NPO法人 あおもりNPOサポートセンター 理事長 田中 弘子 氏
2. 内容	<p>◆各グループの発表◆</p> <p>～まちづくりサポートし隊～</p> <p>24年度は天然温泉が12か所あることが三沢の自慢であり魅力だが、魅力に気づいていない市民、また、外国人にも温泉という日本文化を知ってもらい、温泉の力で三沢を盛り上げ、きらきらさせたいとまとめた。</p> <p>25年度は、温泉を手軽に利用してもらい、休日のちょっとした時間でプチ温泉旅行にいった気分になるようなツアーを企画。第1回目のは陶芸体験と温泉入浴、軽食。また市内の温泉を全て巡った方に記念品の贈呈を考えている。市内の施設やイベントと組み合わせることで街の活性化を行いたい。</p> <p>添乗員に扮したメンバーがツアーの内容を説明。</p> <p>（小川添乗員）</p> <p>本日は温泉入浴と陶芸体験のみさわ湯めぐりあい隊にご参加いただきありがとうございます。みなさんのご案内役の小川と坂岡です。みなさんが笑顔でほっこりとした気分で帰れるよう、こころより「お・も・て・な・し」をしたいと思います。何かございましたらお気軽に声をおかけください。</p> <p>（坂岡添乗員）</p> <p>只今、このバスはスカイプラザを出発しまして、市民の森温泉浴場へ向かっています。航空科学館の前を通りますが、お時間の都合上省かせていただきます。今後のツアーで盛り込む予定です。そして、墓地公園が見えてきます。墓地というと近寄りたいたいですが、花が植えられ、イベントが催され、公園としての役割をはたしています。市民の森温泉浴場につきました。出発まで温泉と軽食をお楽しみください。</p> <p>といったような感じで実施したい。おもてなしの心をもって街を盛り上げていきたい。みなさんにお配りしたチラシはバスと足跡で「人」という字になっている。湯めぐりと人とのめぐり合い。裏面は三沢市内の温泉について。</p> <p>～田中先生から～</p> <p>深浦は不老不死温泉があり、ウェスパ椿山に食べる所、温泉、スロープカー、ビーズ、ガラス工芸の体験がセットになっている。しらかみリゾートの電車にくっつけた。似たような発想でいいなと感じた。「今、あるもの」を使うのが良い。1つではなく、2、3のツアーを作って提案すると、観光物産課などから民間会社にいくこともあるかも。1つずつ積み重ねて、形を作っていくと良い。もし、上手くいかない時は、助成金で実行することも可能。回数が多いと大変なので、四季を織り交ぜて4回でもいいかも。「三沢＝温泉」と定着するようにすると良い。</p>



～斗南藩・六十九種草堂～

昨年話し合った中から紙芝居をやってみようということで挑戦。三沢を楽しく知りたいという思いで作った。小さい紙芝居で紹介。

◎紙芝居の内容◎

廣澤安任は福島県で誕生。32歳の時国の仕事を頼まれて函館へ。函館から福島県を往復し、下北半島に立ち寄った。



38歳の時に戊辰戦争。会津藩が負けて、福島県を追い出され、下北半島に行くことに決めた。何も東北だけ、会津藩の人たちが助け合って生きていけるかもしれないと思った。船から降りると、目的地までずっと歩いた。靴もなく、裸足や草履で歩いていた。暖かい服も食べ物もほとんどなくて、途中で力尽きて死んでしまう人もいた。そしてたどり着いたのが、下北半島がある青森県。ここに住むことになった。会津の人は斗南藩と名付けた。「遠い北の地ではあるが日本の国、天皇の国であることに変わりはない。共に北斗七星を見ることができる。」と言っていた。いつか会津へ帰る日が来てほしいという願いが斗南藩に込められたのかもしれない。貧しく、慣れない畑仕事で収穫がなく、食糧に困った人が山菜、草の根、馬が食べるようなものを食べていた。会津のげんだかって言われていた。そんな中、日新館という学校を作った。どんなに貧しくても、困難でも、勉強した。知識・勉強が必要だという会津藩の考えは立派だった。下北に13か所の学校を設立。斗南藩の副リーダー。藩をなくして全てを青森県にするように力を尽くした。三沢市谷地頭に42歳のとき、民間洋

式牧場、開牧舎を作った。イギリス製の農機具や種を仕入れて、岩手県の久慈市などから牛を180頭、東京からメス牛や馬を買った。そして、チーズや骨付きハム、レストランで食べるような洋食を作った。明治天皇に褒められて賞金をもらったこともある。立派な行いが多くの人に認められた。大久保利通、原敬に東京にこないかと誘われたが、「野にあって国家に尽くす」と、青森県の地方にいても国のために仕事ができると断った。牧場の牛に関する本、陸奥の国の運輸、小川原湖開発、三本木産馬組合、69種類の牧草を博覧会に出すなどめざましい活躍だった。東京に仕事に行っている時に、61歳で生涯をとじる。偉大な力は人々に言い伝えられている。

歴史を言葉で伝えるのは難しく、絵にするのも難しい。紙芝居であれば、このような形で伝えることができる。また、劇みたいな形で発表しても身に付くのかなと考える。そして、マックテレビで紹介すればみんなに知ってもらえる。

～田中先生から～

とっても素晴らしい。三沢には大事なものがあつたはずなのに、子どもたちに伝えていなかったのがもったいない。先人記念館にこどものわかるものがない。脚本、語りがうまかった。子どもたちの中にも三沢をもっと知りたいという子が出てくるかもしれない。ぜひ紙芝居で形にして実現してほしい。広報で宣伝して、学校に呼ばれる形でもいいかも。市内の小学校で先人記念館に遠足や社会見学で出かけたときに、子どもたちを集めてボランティア等で話をすると、市内の子供たちに伝えられる。紙芝居の貸し出しもできる。これをきっかけに子供たちに教えてほしい。紙芝居を作るのは助成金でやるのも良い。

～英語でレシピ～

「きらきら・キッチン！！」(料理教室名)

英語での料理番組作りを目指していたが、マックテレビとの関係などから、英単語を要所に使った料理教室を開催し、マックテレビで取り上げてもらうことにした。料理教室は来年2月15日(土)11:00から始め、お昼を食べながら英語を勉強する。場所は国際交流教育センター。メニューは三沢特産のものをいかしたキャロットパンケーキ、ほっきスープ、みさわいなり。みさわいなりは、そうめんとごぼうをボイルしたものをいなりずし風にする。対象者はお子様から大人まで。外国人の参加も歓迎。参加費は、未就学児は無料、小学生300円、中学生以上500円で定員は20名。広報に掲載、City newsも考えている。可能ならマックテレビでも宣伝。料理教室の際、参加者は外国人の名前で呼び合うことにする。男性の名前のボックス、女性の名前のボックスから選び、料理をしている間はその名前で呼び合う。例えば、ミシェル、サリー、キャリー、デビ、チャロなど。参加料で全てをまかない、20名なのでチラシは作らない。



～田中先生から～

これも出前講座のような形でいくと良いのかも。英語が小学校から必修になる。三沢は英語教育の一等地。食べることが入ると覚えやすい。教室を開催して参加者を待つだけでなく、出前講座的な形で自分たちから動くと発展していきやすく、これから続けられると思う。料理教室だけで終わってしまうともったいない。最初のミッションを柱において進めてもらうとより良い。子供たちが大人と一緒にやっていると見ることによって広がっていく。また、イクメン・カジダンにも取り入れてもいいかも。英語の強い三沢になってほしいので、実現できることを願う。

◆田中先生からの総括◆

温泉の班は4つほどプランを作って、観光協会、観光物産課に話をもっていき実現可能。斗南藩は大変面白い取っ掛かりであった。素晴らしい先人が三沢にいたという夢を子供たちに与えてほしい。きらきらキッチン、料理教室だけではなく、子どもたちに幅を広げていってほしい。



◆受講生から一言◆

◆閉会◆



【所感】

全5回のセミナーで、三沢市の魅力を伝えるための具体的な方法について話し合い、まとめた。各班の発表内容が大変充実しており、1つの班は2月に実施、また、残りの2班もぜひ実現してほしい内容であった。実現するにあたり、各班の時間的な部分、金銭面等難しい部分もあるが、市民提案事業等の利用などで活動を支援していき、三沢市がきらきら輝くような街にしたい。「出会って、つながって、動き出す」この言葉を大切に継続して取り組めるようにしていきたい。

以上、平成25年11月8日(金)開催の「まち・きらきらセミナー」の概要報告といたします。